

打越遺跡 第48地点

遺跡名	打越遺跡
よみがな	おっこしいせき
調査地点	第 48 地点
主な時代	縄文時代前期（約 6500～5500 年前）
調査地	東みずほ台四丁目 30 番 5、30 番 8、30 番 40
調査面積	701.45 m ² のうち、約 88 m ²
調査期間	令和 4 年 11 月 30 日～12 月 27 日
調査内容	<p>【確認された主な遺構】 縄文時代竪穴住居跡 3 軒、縄文時代集石 1 基 等</p> <p>【出土した主な遺物】 縄文土器、石器、自然遺物（ヤマトシジミの貝殻など）</p> <p>【概要】</p> <p>現在のみずほ台小学校の周囲に広がる打越遺跡では、旧石器時代から戦国時代に至るまで、様々な時代の人々が生活していた痕跡が見つかっており、中でも縄文時代早期後葉から前期前葉の集落跡は、関東でも屈指の規模と言えます。この大規模集落が営まれていた時代は、現在よりも海水面が高い「縄文海進」の時期にあたります。遺跡のすぐ近くを流れる江川は、現在は本郷中学校近くで新河岸川と合流していますが、当時は現在の南畑地域に広がる浅海へ流れ込む河口部があり、その周囲には干潟が広がっていたことでしょう。</p> <p>今回の発掘では、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 3 軒などの調査を行いました。3 軒の竪穴住居跡のうち 1 軒は、6 本の主柱と多数の壁柱穴（壁際をめぐる細い柱穴）をもち、縦約 9 m×横約 6 mの長方形を呈する大きなものです。住居跡の中には、当時の人々が食べては捨てた貝の殻が積み重なった「貝塚」が形成されていました。捨てられた貝殻のほとんどは、汽水（海水と淡水が混じり合った水）を好んで生息するヤマトシジミです。川と海とが交わる江川河口部の干潟で、豊富な貝類を獲りながら暮らしていた当時の人々の様子が伺われます。</p>



縄文時代竪穴住居跡の中に貝殻が堆積している様子（写真奥が住居跡の入口部分）

打越遺跡 第48地点



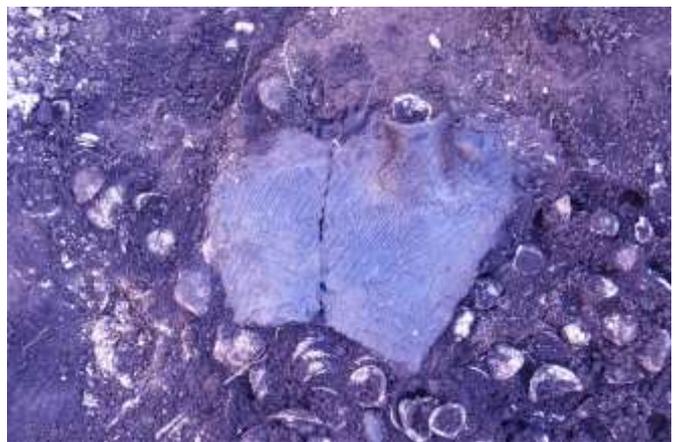
縄文時代竪穴住居跡の完掘状況 1
(写真奥が住居跡の入口部分)



縄文時代竪穴住居跡の完掘状況 2
(写真右が住居跡の入口部分)



調査の様子



ヤマトシジミの貝殻が堆積する層から、
縄文時代前期の「片口土器」が出土した様子



縄文時代前期の土器が出土した様子



「けつ状耳飾」の破片が出土した様子